

# 生徒指導・教育相談における児童生徒の 自己肯定感アセスメントの方法論整理 — 質問紙法と潜在連合テストの観点から —

横嶋 敬行 (信州大学 学術研究院総合人間科学系)

## 1. 本論文の概要と目的

2022年12月、生徒指導提要の改訂版が公表された。12年ぶりの改訂ということで、多様化や複雑化する学校教育への問題に幅広く言及されるとともに、心理面の支援ではこれまでと同様に児童生徒の自己肯定感への教育的支援の重要性が強調されていた。また、自己肯定感については、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」という表現が用いられており、生徒指導・教育相談で育むべき自己肯定感の特徴も示されていた。

他にも、生徒指導と教育相談を一体として進めるために求められる姿勢についてもポイントが示されており、その1つとして、指導や支援の在り方は価値観や信念から考えるのではなく、児童生徒理解（アセスメント）に基づいて考えることが必要であると明記された。生徒指導・教育相談における児童生徒理解の観点や方法論は多岐にわたるが、自己肯定感のアセスメント（見立て）に関して言えば、心理検査の使用が選択肢の1つに含まれてくるであろう。

実際に、既に多くの学校で心理検査を使った自尊感情（self-esteem）や自己肯定感のアセスメントが実施されている。また、心理学では自己肯定感とほぼ同義の概念である自尊感情の名称で研究が蓄積されているため、学校でのアセスメントにも自尊感情に関する心理検査が使用されている。とりわけ、最も広く使用されているのはRosenbergの自尊感情尺度（Rosenberg Self-Esteem Scale: 以下、RSES, Rosenberg, 1965）であろう。東京都教職員研修センターが慶応義塾大学と連携して作成した「自尊感情測定尺度（東京都版）」にはRSESの尺度項目が参照されており、内閣府（2014）や国立青年教育振興機構（2015）の調査項目も、RSESに使われている尺度項目の一部と近似するものが使用されている。

さらに、近年では、潜在連合テスト（Implicit Association Test: 以下、IAT, Greenwald & Banaji, 1995）による自尊感情の測定も注目されている。IATはパソコン（スマホ・タブレットを含む）と紙媒体で行う方法の2種類があるが、ICT教育の進歩と並行して、パソコンやタブレットを使ったIATの活用機会が増えてくると予想される。一方で、RSESやIATにはいくつかの特徴や問題が存在し、「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」の

アセスメントに用いるためには、そうした特徴や問題を理解した上で適切に使用することが求められる。

そこで、本論文では、生徒指導・教育相談において「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」をアセスメントするために必要となる基礎知見を整理することを目的として、①生徒指導提要(2022)について本論文のテーマに関連する情報の要点整理、②近年の子どもたちの自尊感情の実態把握、③精神的健康に対する自尊感情の役割の整理、④「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」に関する自尊感情の概念整理、⑤意識と無意識の自尊感情に関する研究レビュー、⑥IATに関する概説、⑦質問紙とIATによるアセスメントの留意点、⑧学校教育における自尊感情・自己肯定感の具体的なアセスメント方法、以上の8つの観点から論文をまとめる。

## 2. 改訂版の生徒指導提要

### (1) 生徒指導の定義と生徒指導・教育相談の目的

改訂された生徒指導提要(2022)では、生徒指導の定義を「生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う」(p.12)としている。

生徒指導と教育相談の目的は次のように示されている。まず、生徒指導の目的は「生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする」(p.13)とされている。次に、教育相談の目的は「児童生徒が将来において社会的な自己実現ができる資質・能力・態度を形成するように働きかけること」(p.80)という点において生徒指導と共通するが、その差異として「生徒指導は集団や社会の一員として求められる資質や能力を身に付けるように働きかけるという発想が強く、教育相談は個人の資質や能力の伸長を援助するという発想が強い傾向がある」(p.80)と示されている。そして、教育相談は生徒指導の一環として重要な役割を担うものであると位置づけられている。

### (2) ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感

生徒指導提要(2022)では、自己肯定感の重要性が随所に示されている。例えば、「生徒指導において発達を支えるとは、児童生徒の心理面(自信・自己肯定感等)の発達のみならず、学習面(興味・関心・学習意欲等)、社会面(人間関係・集団適応等)、進路面(進路意識・将来展望等)、健康面(生活習慣・メンタルヘルス等)の発達を含む包括的なもの」(p.13)と示されており、生徒指導が支える心理面の発達の代表的な要素として「自

信・自己肯定感」が挙げられている。

自己肯定感は自尊感情に近似する概念である。自尊感情の定義は、研究者によって違いはあるが、「自己に対する肯定的あるいは否定的な態度」(Rosenberg, 1965, p. 8)が基本的な定義として定着している。自己肯定感は、「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」(田中, 2011, p. 133)という定義もあるが、生徒指導提要(2022)が示すように、学校教育では「ありのままの自分を肯定的に捉える」という意味合いで用いられることもある。肯定的な感覚のなかでも「ありのまま」という側面が強調されている点が特徴であるといえる。また、具体的な支援の在り方として、生徒指導・教育相談では、学校での日常生活や学習場面等の集団指導において主体的、協同的な活動を通して、児童生徒が互いを認め合いながら育んでいくことが求められている。他にも、不登校やいじめなどの諸問題によって傷ついた自己肯定感を回復させることや、発達障害の児童生徒に対して特性への理解を持たずに注意や叱責の機会が増えることが自己肯定感を低下させてしまうことへの注意など、個別支援の観点でもその重要性が言及されている。

### (3) 教育相談体制で求められる姿勢

生徒指導では集団や社会の一員として求められる資質や能力を身につけるように働きかけるという観点が強調されるのに対して、教育相談は個人の資質や能力の伸長を支援するという性質が重視される。生徒指導提要(2022)では、性質の異なる生徒指導と教育相談を一体として進めていくために求められる姿勢についても示されている。その1つとして、「指導や援助の在り方を教職員の価値観や信念から考えるのではなく、児童生徒理解(アセスメント)に基づいて考えること」(p. 80)がある。ここでの「アセスメント(見立て)」とは、「チーム支援において、当該児童生徒の課題に関連する問題状況や緊急対応を要する危機の程度等の情報を収集・分析・共有し、課題解決に有効な支援仮説を立て、支援目標や方法を決定するための資料を提供するプロセスのことである」(p. 80)と説明されている(生徒指導提要, 2022)。多角的な情報収集に基づき、チーム支援で生徒指導・教育相談に取り組むビジョンが示されていることが特徴であるといえる。

また、そのアセスメントの方法として、現在、心理学・精神医療・福祉等の領域で主流となっている生物心理社会モデル(Bio-Psycho-Social Model: 以下、BPSモデル)が紹介されている。BPSモデルでは、対象に生じている問題や課題を、生物・心理・社会の3つの要因からアセスメントを進める。例えば、児童生徒の場合は、生物学的要因(発達特性・病気等)、心理学的要因(認知・感情・信念・ストレス・パーソナリティ等)、社会的要因(家庭・学校環境・人間関係等)から、問題の実態が把握される(生徒指導提要, 2022, p. 91)。それと同時に、課題解決に必要な自助資源(自分の良さや長所、可能性)と、支援資源(問題解決に役立つ人・機関・団体等)を探ることの重要性を挙げている。

学校教育においてBPSモデルに基づいてアセスメントを進めるためには、外部機関と

の連携が不可欠になる。特に、生物学的要因については、医療機関等と連携を取りながら情報を集めることが不可欠であろう。心理学的要因についても、医療機関等からの情報が大きな影響力を持つことになるが、学校現場向けに市販されている心理検査等を使用することで、学校内部でも心理面に関する客観的な情報を集めることができる。とりわけ、自尊感情や自己肯定感については、質問紙法等の心理検査で可視化し、教育的支援に活用するという機会も少なくないだろう。

### 3. 子どもたちの自尊感情の実態

#### (1) 自尊感情の低さに関する指摘

自尊感情は社会的にも注目度の高い心理概念であることから、多くの調査が行われてきた。そして、日本の子どもたちの自尊感情の低さは、繰り返し指摘されている。

世界における日本人の自尊感情の実態からみていくと、Schmitt & Allik (2005) の研究では、世界 53 カ国の中で最も低いことが明らかにされている。日本の子どもたちの自尊感情の実態については、例えば、古荘 (2009) では、子ども用の QOL (Quality of Life) 尺度の開発を行う過程で日本、ドイツ、オランダの子どもたち (小学生から高校生まで) の自尊感情の測定を行い、ドイツ、オランダと比較して日本の子どもたちの自尊感情が低かったと報告している。内閣府 (2014) の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では、日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの 7 カ国の満 13 歳から 29 歳の若者を対象に意識調査が行われ、その内、自己肯定感に関わる項目において、日本は諸外国と比べて「自分自身に満足している」「自分には長所がある」と答えた者の割合が最も低いという結果が示されている。国立青少年教育振興機構 (2015) の調査では、「自分はダメな人間だと思うことがあるか」という質問に対して、日本の高校生は約 72.5% が「とてもそう思う」あるいは「まあそう思う」と回答しており、中国 (56.2%)、アメリカ (45.1%)、韓国 (35.2%) と比較して、自己否定的な認識を持っている高校生が多いことが明らかにされている。内閣府 (2014) や国立青年教育振興機構 (2015) の調査は、標準化された心理尺度ではないが、質問項目の内容は自尊感情を測定する質問項目と近似しており、自尊感情の実態の一部として解釈することが可能であろう。

#### (2) 自尊感情の時代的な変化

横断的な調査から絶えず日本の子どもたちの自尊感情の低さが指摘されているが、近年は、その低い水準が時代の推移とともにより一層下降しているという議論もある。

例えば、小塩・岡田・茂垣・並川・脇田 (2014) では、調査年ごとに収集された統計量データを統合することで、データの時代的な変化を解析していくという時間横断的メタ分析 (cross-temporal meta-analysis) の手法を用いて、1980 年から 2013 年 3 月までに日本の研

究で報告された RSES の平均値を調査年ごとに収集し、その時代的变化を検討している。その結果、日本人の各世代間の比較では、大学生に比べて中学生・高校生の平均値が低く、成人や高齢者の平均値が高い傾向にあり、時代的变化では、調査年が最近になるほど自尊感情の平均値が下降していることを明らかにしている。さらに、小塩・茂垣・岡田・並川・脇田（2018）の研究では、上記のデータに 2013 年から 2017 年までに発表された論文のデータを加えて分析を行ったところ、近年においても、中学生・高校生や大学生よりも成人、高齢期の平均値が高いこと、調査年に従って平均値が下降傾向にあることが続いていることを報告している。

これらのデータを総合的に解釈すると、日本の子どもたちの自尊感情は世界的に低い水準にあるだけでなく、日本社会全体のなかでもとりわけ低く、さらに時代を追うごとにその状態は悪化していることが分かる。その背景には、長期化している社会経済的要因や、離婚率や虐待の増加、不登校・いじめなどの学校不適應の増加、インターネットや携帯電話の普及に伴う人々の結びつきの変化など、多くの社会問題も関連していると考えられている（c.f., 小塩・脇田・岡田・並川・茂垣, 2016）。自尊感情や自己肯定感の育成はこれまでも学校教育において重要視されてきたが、これまで以上に注力すべき教育上の課題の 1 つであるといえるだろう。

#### 4. 精神的健康に対する自尊感情の役割

##### （1）ストレス社会の現状

社会や学校教育が自尊感情を重要視する背景には、不安やストレスを軽減し、精神的健康に良好な影響を与えることが多くの研究で指示されていることにある（e.g., Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003）。長年注目されてきた概念であるが、ストレス社会と呼ばれる現代において、改めてその重要性が認識されている。

現代の日本では、生涯を通じて 5 人に 1 人が何らかの精神疾患にかかるといわれており（厚生労働省, 2017a）、心の病に苦しむ人々は右肩上がりに増加している。厚生労働省（2017b）の「患者調査の概況（平成 29 年）」をみると、精神疾患を有する総患者数は、外来患者が約 389.1 万人、入院患者が約 30.2 万人、総数 419.3 万人にのぼり、日本人の 30 人に 1 人の割合となっている。平成 14 年度の調査結果総数（約 258.4 万人）と比較すると、平成 29 年度までの 15 年間で約 160.9 万人も増加していることが分かる（厚生労働省, 2022）。

さらに、精神疾患の疾病別に詳細な情報をみていくと、平成 29 年度調査における精神疾患を有する外来患者 389.1 万人の内、最も患者数が多いのは気分障害の約 124.6 万人であり、次いで神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害の約 82.8 万人が続いている。15 年前の平成 14 年度の調査結果と比較すると、前者は約 1.8 倍、後者は 1.7 倍の増加となっている（厚生労働省, 2022）。このように、心の病に苦しむ者の増加は深刻な社会問

題となっている。

## (2) ストレスのメカニズム

こうした精神疾患の多くは、ストレスと深い関係にある。ストレスとは外部からの刺激を受けたときに生じる緊張状態のことである。ストレスの原因となる刺激はストレッサーと呼ばれ、ストレッサーによって生じる生体の反応はストレス反応と呼ばれる。生体にストレッサーが作用したとき、ストレス反応を引き起こす引き金となるのが、脳の扁桃体である。生体にストレッサーが加わると、扁桃体が賦活して視床下部に情報が伝達されると、視床下部はストレスに対抗するためのホルモンを分泌するように自律神経系や内分泌系などの器官に指令を送る。このとき、視床下部からの指令を受けて副腎皮質から分泌されるホルモンの1つにコルチゾールがある。コルチゾールは、ストレッサーの作用によって急激に分泌が増えることからストレスホルモンとも呼ばれており、コルチゾールが過剰に分泌され続けると、生体のホメオスタシスがバランスを崩し、うつ病、不眠症といった精神的不調や、生活習慣病のリスクが高まることが知られている。

また、ストレス反応の生起については心理的な要因も関連する。Lazarus & Folkman (1984) は、ストレッサーが直接的にストレス反応を引き起こすのではなく、認知的評価の観点から心理的ストレスモデルを提唱している。Lazarus らの理論では、ストレス反応の原因になる可能性がある事象を潜在的ストレッサーと呼び、この潜在的ストレッサーに対して、「これは自分を害するものである」などの認知的評価や判断（一次的評価）が行われると、潜在的ストレッサーはその人にとってのストレッサーになるとされている。また、「そのストレッサーを自分にとってどの程度コントロールできるものなのか」といった対処可能性に関する評価（二次的評価）が行われることによって、ストレス反応の強度や種類が規定される。そして、こうした認知的評価は、個人の心理特性の影響を受けることから、個人の心理特性はストレスの契機や加速要因になると考えられている。

## (3) 不安やストレスと自尊感情の関連

自尊感情はストレスとの関連が長年注目されてきた心理特性の1つであり、高い自尊感情はストレス反応を緩和させることが明らかにされている。例えば、Pruessner, Hellhammer, & Kirschbaum (1999) の研究では、ストレッサーとなる課題を与え、その際に生じる参加者のストレス反応（唾液に含まれるコルチゾールレベル）と自尊感情との関連を検討している。実験では、参加者の半分には簡単な課題（成功条件）が課され、もう半分には難易度の高い課題（失敗条件）が与えられている。そして、強いストレッサーが加えられた失敗条件において、自尊感情とコルチゾールレベルの間に負の相関が確認されている。つまり、自尊感情が高いほど、強いストレッサーが加えられた際のストレス反応が少なかったことが示されている。

Greenberg らの恐怖管理理論 (terror management theory, Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986) においても、自尊感情はストレッサーによって生じる不安や恐怖といった感情に対する不安緩衝機能 (anxiety-buffering function) の役割があると論じられており、仮説の検証として次のような実験が行われている。この実験では、自分の人格に関する肯定的なフィードバックを与える群と、中庸的なフィードバックを与える群に実験参加者を分け、それぞれにフィードバックを与えた後、死の脅威を想起させるビデオ (検死解剖や死刑囚の電気処刑など) を視聴させ、視聴後に感じる不安の程度を比較している。その結果、肯定的なフィードバックが与えられた群の方が、中庸的なフィードバックが与えられた群よりも、ビデオの視聴で感じる不安の程度が低かったと報告されている (Study 1; Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, Simon, & Pinel, 1992)。肯定的なフィードバックが与えられた群は、一時的に自尊感情が高められた状態になっており、高められた自尊感情がビデオの視聴によって生じる不安や恐怖を緩和させたと考察されている。

内田・上埜 (2010) では、自尊感情と自動思考との関連が検証されており、自尊感情が高い者は肯定的な自動思考を抱きやすいが、自尊感情が低い者は否定的な自動思考を抱きやすいことが明らかにされている。自動思考とは、自分の意志とは無関係に自分の意識上に上がってくる思考や考えのことであり (e.g., Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979)、否定的な自動思考によって抑うつ症状が強まることが分かっている (Harrell & Ryon, 1983)。

精神疾患のある臨床群を含めた研究においても、現在うつ病の者、以前うつ病だった者、うつ病にかかったことがない者の3グループの自尊感情得点を比較した結果、現在うつ病の者は他のグループと比べて自尊感情が低かったことが報告されている (Butler, Hokanson, & Flynn, 1994)。こうした知見は世界的に概ね共通している。Schmitt & Allik (2005) の研究では、日本を含めた世界 53 カ国で調査を行い、ほぼすべての国で、自尊感情は神経症傾向 (不安や怒りなど負の感情を経験しやすい性格特性) と負の関連が示されている。

以上のように、自尊感情と不安やストレスとの関連は多くの研究で支持されており (e.g., Baumeister et al., 2003; Rosenberg & Owens, 2001; Sowislo & Orth, 2013)、精神科領域で病気の診断に用いられる DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) では、うつ病をはじめ、不安障害、統合失調症、摂食障害、各種の人格障害など、多くの病気の診断に自尊感情の高低の基準が設けられている (O'Brien, Bartoletti, & Leitzel, 2006)。

## 5. ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感の概念的特徴

### (1) 自尊感情研究における「ありのままの自分」とは

高い自尊感情は精神的健康に良好な影響を与えると考えられている。一方で、自尊感情にはさまざまな様態があり、精神的健康にとって好ましくない自尊感情の様態があることも指摘されている (e.g., Deci & Ryan, 1995; Kernis, 2003)。

生徒指導提要 (2022) で表現される「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」は、当然ながら精神的健康を高める自尊感情の様態を示すものであろう。自尊感情研究では、「ありのままの自分」の機能のことを本来性 (authenticity) と表現する。そして、本来性が発揮されることで高まる自尊感情は最適な自尊感情 (optimal self-esteem, Kernis, 2003) などと呼ばれている。そのため、研究上の概念としては、最適な自尊感情が「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」と最も近似する概念であるいえるだろう。最適な自尊感情の他にも、これまで多くの精神的健康を高める自尊感情の概念理論が論じられてきた。「ありのままの自分を肯定する」という概念への理解を深めるために、それらの概念理論は大きな基盤となるだろう。以下では、いくつかの概念理論を取り上げてレビューしている。

## (2) 精神的健康を高める自尊感情の概念

精神的健康を高める自尊感情の様態に関する理論は、古くは、Rosenberg (1965) も論じている。Rosenberg は自尊感情を「自己に対する肯定的あるいは否定的な態度」(p. 30) と定義し、その肯定的な感覚を very good と good enough の二つの特徴に大別して説明している。very good という自己肯定感を強く抱く者は、自分が他者よりも優れていると考えており、また自分で設定した基準に達していなければ不十分であるという感情を抱くという。これに対して good enough という自己肯定感を強く抱く者は、自分自身を平均的な人間であると考えており、それでも自分自身に対して満足した見方をもっていると述べている。また、自己理解や自己受容、自身の成長への希望や確信を抱いていると説明している。

また、Deci & Ryan (1995) は、本当の自尊感情 (true self-esteem) という表現でその特徴を論じている。本当の自尊感情とは、確かな自己価値の感覚に基づいて安定したものであり、ありのままの自分であることや、他者との本来性を尊重した関係性の文脈 (the context of authentic relationships) のなかで、自律的な行動を起こしていくことで形成されていくと論じられている。そして、こうした自尊感情は、能力 (competence)、関係性 (relatedness)、自律性 (autonomy) といった内発的動機づけの基盤となる基本的欲求 (basic needs) が満たされることで生起すると述べられている (Moller, Friedman, & Deci, 2006)。

さらに、Kernis (2003) は、最適な自尊感情 (optimal self-esteem) という表現で論じている。最適な自尊感情の理論では、その中核を形成する機能が本来性 (authenticity) にあると強調している。本来性とは、日々の活動において本当の自分 (true self) あるいは自己の核となる働き (operation of one's core) が妨げられていないことであると定義されており (Kernis, 2003)、本来性を構成する要素としては、(1) 自己理解への気づき、(2) 客観的に自己評価を行うことができる歪みのない処理、(3) 自己の価値や欲求と行動の調和、(4) 親密な人間関係における開放的で、誠実で、偽りのない対人関係への志向性、この4点があげられている (Goldman, 2006)。authenticity は、一般的な日本語では確実性や真正である



ことと訳されるが、心理臨床の領域において「本来性」の用語が使われている（伊藤・小玉, 2005）。また、伊藤らは、本来性の意味は「本当の自分」や「自分らしさ」と表現される感覚に近いものであると述べており、自分らしくある感覚を本来感 (sense of authenticity) と表現している。

日本の研究でも、良好な精神的健康の基盤となる自尊感情の概念が論じられている。その1つに、近藤 (2010) の基本的自尊感情 (basic self-esteem) の概念がある。基本的自尊感情は、幼少期の養育者との関係のなかで形成される愛着 (アタッチメント, attachment) を基盤として、成長の過程で共有体験を重ねていくことで、より強固に形成されるものであり、無条件で絶対的な感情であると定義されている。他にも、山崎・横嶋・内田 (2017) は、自律的自尊感情 (autonomous self-esteem) の概念を提唱している。自律的自尊感情は自己信頼心 (self-confidence), 他者信頼心 (confidence in others), 内発的動機づけ (intrinsic motivation) が相互に一体となって高まることで形成されると論じられている。また、自律的自尊感情は非意識性 (nonconsciousness) が高い概念であることも強調されている。

### (3) ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感の概念的特徴

上記の概念論は、どれも精神的健康を高めることができる自尊感情の様態を論じたものであり、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」の特徴への理解を深めることができる議論であると考えられる。Goldman (2006) もその特徴を総括しているが、ここでは大きく3つの観点から特徴をまとめる。

第1に、肯定感に関する感情的特徴である。自己に対する肯定的の態度あるいは肯定的の感情は多岐にわたり、すべての自己肯定の感情が精神的健康を高めるわけではなく、優越感やプライドなどの一部の肯定感は、精神的健康や適応行動を悪化させる側面があると指摘される (e.g., Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。そのため、最適な自尊感情の概念では感情的特徴への着目が重要になると考えられる。先行研究の概念理論では、自己信頼や自己受容、本来性 (本来感) が感情的特徴にあたり、その基盤は幼少期に育まれる愛着にあると考えられる。生徒指導・教育相談においても、こうした感情的特徴に着目しながら、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」をアセスメントし、教育的支援を行うことが求められると考えられる。

第2に、他者との良好な関係が基盤になることである。生徒指導提要 (2022) では、生徒指導は「社会の中で自分らしく生きることができる存在へと自発的・主体的に成長や発達する過程を支援する」と示されており、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」も、学級活動や学習場面での集団活動における他者との協働・協調のなかで育んでいくと記述されている。Deci & Ryan (1995) では、他者と本来性を尊重し合う関係性のなかで、自律的な行動を起こしていくことで育まれるとされており、山崎他 (2017) においても、他者信頼心と一体となって高まる自尊感情が精神的健康を高めるものであると論じられてい

る。学校教育ではお互いの個性や特性を尊重し合いながら、共同生活や共有体験の積み重ねを通して、他者への信頼を伴ったありのままの自己への肯定感を育むことが目指される。

第3に、意識と無意識の自己肯定の一致である。これは、Goldman (2006) が示す (1) 自己理解への気づき、(2) 客観的に自己評価を行うことができる歪みのない処理、(3) 自己の価値や欲求と行動の調和の3つの観点に関連する特徴であり、意識で捉えられる自尊感情と無意識に形成されている自尊感情への「気づき」と「一致」を意味する。詳細は次節で扱うが、近年、意識と無意識のそれぞれの自尊感情の役割や不一致 (discrepancy) に関する研究が進められている。学校教育における自尊感情のアセスメントは質問紙法が主流であるため、意識的な自尊感情は可視化・数値化する機会も多い。しかし、無意識的な自尊感情は客観的に把握しにくい。冒頭で触れた IAT は、この無意識の自尊感情をアセスメントする方法になるが、質問紙法と組み合わせて自尊感情の状態を解釈するためには、意識と無意識の自尊感情に関する知識が求められる。

## 6. 意識と無意識の自尊感情

### (1) 意識と無意識の2つのシステム

心理臨床では、クライアントを多面的、重層的に理解するために、多くの場合が複数の方法を組み合わせて (テスト・バッテリーを組んで) 検査を行う。多面的とは、知能や性格特性などを多面的に理解することを指す。重層的とは意識から無意識までを捉えていこうとすることを指す。生徒指導・教育相談におけるアセスメントでも、児童生徒の相談への対応や、日々の様子の観察、心理検査を通して、意識から無意識までを多面的・重層的に見立てていくことで、深い児童生徒理解が得られると考えられる。

人の意識と無意識に関する理論は研究領域によって諸説あるが、ここでは、質問紙と IAT による自尊感情アセスメントの方法論を整理するという論文の主旨に沿って、社会心理学領域で用いられる二重過程理論 (dual-process theories, Kahneman, 2003; Strack & Deutsch, 2004) から人の意識と無意識の機能を説明する。

二重過程理論では、人の意思や行動の決定要因として、意識と無意識の二つのシステムが論じられている。システム1は無意識的・直感的で、より素早い処理を可能とする機能であり、潜在連合 (implicit association) の強さや動機づけの方向性によって意思や行動の決定に影響を与える。システム2は意識的、熟考的で、比較的に処理に時間を必要とする機能であり、知識に基づいた思考や判断によって意思や行動を決定する。両システムは共同的に機能しており、システム2の意識的な機能は、システム1の無意識的な機能を統制・調整する役割をもつと同時に、システム1の機能からの影響を受けながら機能していると考えられている。第4節で説明したストレス反応に関わる脳や生体の生理的変化 (扁桃体の賦活など) においても、外部のストレスに対して意識で知覚されるよりも早く生起

し、無意識に人の意思や行動を動かしている。現代では、無意識のプロセスが意識のプロセスに先行して、人の意思や行動の決定に大きな影響力を持っていることが、多くの研究で明らかにされている (c.f., 越智, 2018)。

二重過程理論に依拠した研究では、どちらのシステムで心理測定を行うかによって、測定される概念が意識 (顕在, explicit) なのか無意識 (潜在, implicit) なのかを大別する。自尊感情では、質問紙などの意識的なシステムで測定される指標を顕在的自尊感情 (explicit self-esteem) とし、IAT などの無意識的なシステムで測定される指標を潜在的自尊感情 (implicit self-esteem) と呼ぶ (Greenwald & Farnham, 2000)。

顕在的自尊感情と潜在的自尊感情は必ずしも一致せず、無相関であるという結果や (e.g., Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; Zeigler-Hill, 2006), 弱い正の相関であることが報告されている (e.g., Buhrmester, Blanton, & Swann, 2011, このレビューでは  $r = .13$  から  $.21$ )。そのため、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情は精神的健康に対して異なる役割を持っていると考えられている (e.g., Beevers, 2005)。また、質問紙を使った顕在的自尊感情の研究が抑うつやストレス等の精神的健康と負の関連にあるという知見は一貫した基盤があるが、潜在的自尊感情については精神的健康に対する役割や、顕在と潜在の両方の自尊感情の不一致については、現在も解明が進められている。

## (2) 潜在的自尊感情と精神的健康の関連

精神的健康と潜在的自尊感情の関連は、うつ病の認知モデル (e.g., Beck et al., 1979) を基盤に論じられることが多い。うつ病の認知モデルでは、否定的なライフイベント (日々のストレス) を経験すると、成長に伴って形成された深層にある信念や態度 (スキーマ) が活性化し、その結果、自らの意思とは関係なく自動的・反射的に否定的な自動思考が意識に上がってきて、抑うつ感情の症状を強めると説明される。また、自動思考が顕著に生じるのは自己・世界・未来の3領域であり、自己に関連したスキーマが否定的なものであると、自己に関連した世界・未来も否定的に歪んでしまうとされる。そのため、抑うつ気分維持・生起の中核には否定的な自己関連のスキーマがあると考えられている。スキーマは、二重過程理論における潜在的態度にあたることから、潜在的自尊感情と抑うつとの関連に着目する研究では、Beckらの理論を基盤として導出されるものが多い (e.g., Risch, Buba, Birk, Morina, Steffens, & Stangier, 2010; Romero, Sanchez, Vázquez, & Valiente, 2016)。

そこで、まずは臨床群を対象とした研究に着目すると、次のような研究が報告されている。例えば、Risch et al. (2010) では、うつ病患者、寛解したうつ病患者、健康な者の潜在的自尊感情を比較し、うつ病患者は健康な者よりも潜在的自尊感情が低いことを確認している。また、寛解したうつ病患者とは症状がほとんどなくなった状態の者を意味しているのだが、うつ病が寛解した者であっても、うつ病エピソードを3つ以上有する者は、うつ病エピソードが3つ未満の現在うつ病である患者よりも、潜在的自尊感情が低いことが明

らかにされている。Romero et al. (2016) においても、うつ病患者は健康な者と比べて顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の両方が低いことが示されている。Buhlmann, Teachman, Gerbershagen, Kikul, & Rief (2008) では、自分の外見の想像上の欠陥やわずかな欠陥にとらわれてしまう身体醜形障害 (body dysmorphic disorder) と診断された者は、健康な者と比べて潜在的自尊感情が低いと報告されている。一方で、潜在的自尊感情についてはうつ病患者と非臨床群の間で差はみられなかったとする研究もあり (De Raedt, Schacht, Franck, & De Houwer, 2006; Kesting, Mehl, Rief, Lindenmeyer, & Lincoln, 2011), 現在も議論が続いている。

また、臨床群と非臨床群における顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の関連の違いも注目すべき点である。先述でも示したが、非臨床群を対象とした研究では、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の関連は無相関 (e.g., Jordan et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006) か弱い正の相関である (e.g., Buhrmester et al., 2011)。一方、臨床群では  $r = .41$  (Romero et al., 2016) や  $r = .39$  (Risch et al., 2010) と比較的に高い数値になることが報告されている (Romero et al., 2016)。これは、うつ病等の精神疾患がある臨床群では、潜在的自尊感情の低さに抗うために必要な認知資源が枯渇しているため、両方の自尊感情の関連が高まると考えられている (Beevers, 2005)。実際に、Koole, Dijksterhuis, & van Knippenberg (2001) の研究では、質問紙での自己評価を非常に迅速に回答させた場合や認知的負荷をかけた状態で回答させた場合、つまり、認知資源の枯渇した状態で顕在的自尊感情を測定した場合、両方の自尊感情の関連の強さは増加することを明らかにしている。

続いて、潜在的自尊感情と精神的健康の関連については、次のような研究が発表されている。Steinberg, Karpinski, & Alloy (2007) では、抑うつを測定する BDI-II (Beck Depression Inventory-II, Beck, Steer, & Brown, 1996) を用いてうつ病のローリスク群とハイリスク群のスクリーニングを行い、潜在・顕在の両自尊感情と抑うつの関連を検討している。そこでは、顕在的自尊感情と抑うつの負の関連はローリスク・ハイリスクの両群でみられたが、潜在的自尊感情と抑うつの負の関連はハイリスク群のみで確認されている。また、Steinberg らの研究は4ヶ月の期間をあけた縦断研究であり、否定的なライフイベントが抑うつ気分 に及ぼす影響に対する潜在的自尊感情の関連を検討している。そこでは、ハイリスク群のみ、潜在的自尊感情が低い場合、否定的なライフイベントの増加が抑うつを増加させることを報告している。

Reid-Russell, Miller, Cvencek, Meltzoff, & McLaughlin (2022) では、虐待を受けた子どもたち (8歳から16歳) を対象に縦断研究を行っている。そこでは、ベースラインとフォローアップの両時点において潜在的自尊感情の低さとうつ病、自殺念慮の増加が関連しており、ベースラインの潜在的自尊感情の低さは将来的なうつ病と自殺念慮の増加を有意に予測している。さらに、ベースラインにおいては、不安や外在化の問題にも関連していたという。そして、Reid-Russell らは、これらの結果が、虐待とうつ病や自殺念慮を結びつける潜在的なメカニズムとして、潜在的自尊感情が関連していることを示していると考察している。

一方、上記の研究で臨床群にのみ潜在的自尊感情と精神的健康の関連が確認されている結果の解釈として、Beevers (2005) の理論が参照される。Beevers (2005) は意識と無意識の二重過程理論とうつ病に対する認知的脆弱性について論じており、意識的な処理を行うためには多くの認知資源が必要であるため、認知資源が不足し、意思や行動の決定に意識のプロセスが採用されなくなった場合において、個人の持つスキーマが抑うつ症状の決定に関連してくると述べている。つまり、人の精神的健康に対する潜在的自尊感情の役割の1つとして、精神的健康が危機的状況に晒され、認知資源も枯渇しているという状況下において、精神的健康の悪化を緩和する保護因子（緩和要因）として機能している可能性が推測される。

### （3）意識と無意識の両方の自尊感情と精神的健康の関連

精神的健康に対する顕在と潜在の両方の自尊感情の役割に関する知見については、例えば、Haefffel, Abramson, Brazy, Shah, Teachman, & Nosek (2007) と Romeo et al. (2016) がそれぞれの研究結果を踏まえて次のように論じている。

Haefffel et al. (2007) では、潜在的自尊感情はストレスに対する迅速な感情的反応が決定される際に重要な役割を持ち、顕在的自尊感情は長期的な抑うつ反応により関連しているという仮説に基づき研究を行っている。研究1では、ストレスに対する即時的な感情反応には、顕在的自尊感情ではなく潜在的自尊感情が関連しており、潜在的自尊感情が高いほど感情的苦痛が緩和されることが示されている。研究2は5週間の縦断研究によって、ベースラインの顕在と潜在の両方の自尊感情と否定的なライフイベントが、フォローアップの抑うつに与える影響を検討している。まず、顕在と潜在の両方の自尊感情が別々に検討されており、それぞれ低い場合は、否定的なライフイベントが増えると将来の抑うつが高まることが示されている。一方、顕在と潜在の両自尊感情を同時に回帰式に入れたモデルでは、潜在的自尊感情からの抑うつ症状への主効果は示されているが、交互作用効果は顕在的自尊感情と否定的なライフイベントのみが有意となり、顕在的自尊感情が低い場合のみ否定的なライフイベントが増えると将来の抑うつが高まると報告されている。以上の2つの研究結果は仮説を支持するものとして考察されている。一方、Haefffelらは、潜在と顕在の両方の自尊感情を同時に回帰式に入れた分析において、潜在的自尊感情から抑うつへの主効果が残ったことを取り上げ、この結果は潜在的自尊感情が明確に識別可能なストレスがない場合でも、抑うつ症状を緩和する可能性があることについても言及している。

Romero et al. (2016) の研究では、うつ病における顕在と潜在の両方の自尊感情と自己参照的記憶バイアス (self-referent memory biases) の関連に関する検討が行われている。自己参照的記憶バイアスの測定には The self-referent incidental recall task が使用された。この測定では、画面に 2000 ms で提示される抑うつ (depressive) や肯定 (positive) などの形容詞

に対して、その形容詞が自分の特徴を説明するものならば **yes**、そうでなければ **no** のキーを押すという課題を行い、課題後、3分間で提示された形容詞をできるだけ多く思い出すという課題が行われた。その結果、うつ病患者は健康な者と比較して、抑うつ形容詞を多く思い出し、肯定的形容詞の想起が少なかった。また、うつ病患者において、顕在的自尊感情は抑うつ形容詞の想起と負の相関、肯定的形容詞の想起と正の相関が認められるとともに、潜在的自尊感情と抑うつ形容詞の想起の関連に対する顕在的自尊感情の間接効果が確認された。

Romero et al. (2016) は、この結果を受けて、抑うつ症状の長期的な維持に関連する記憶のプロセスについては、顕在的自尊感情の方が主要因である可能性に言及しながら、従来の認知療法の有効性を支持している。それと同時に、潜在的自尊感情を高めるような条件付けによる介入と、顕在的な自己評価を健全な状態へと再考する能力を高める認知療法の両方の組み合わせによる新しい介入方法の可能性を示唆している。潜在と顕在の両方の自尊感情への介入可能性については、Risch et al. (2010) も指摘しており、うつ病の再発予防のためには顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の両方のレベルに焦点を当てた治療の必要性を強調している。これらの研究には議論の余地が多く残されているものの、教育研究においても、両方の自尊感情への効果的な教育的支援の実践研究を開拓していくことで、児童生徒の自尊感情・自己肯定感の育成に対する教育の発展が期待できると考えられる。

一方、両方の自尊感情の不一致に関する研究からは、そのバランスの重要性も示されている。不一致の研究では、顕在的自尊感情が高くかつ潜在的自尊感情が低いパターンを脆い自尊感情 (fragile self-esteem)、潜在的自尊感情が低くかつ潜在的自尊感情が高いパターンを傷ついた自尊感情 (damaged self-esteem) と呼ぶ。

#### (4) 脆い自尊感情 (Fragile self-esteem)

脆い自尊感情は、初期の研究では、脆く高い自尊感情 (fragile high self-esteem) と呼ばれており (Kernis, 2003)、精神的健康を阻害する自尊感情の不適応的側面の様態として研究された。この自尊感情の不適応的側面への指摘は、1980年代のアメリカで盛んに行われた自尊感情を高める教育 (通称、自尊感情運動) に警鐘を鳴らす立場から追及されてきた (e.g., e.g., Baumeister et al., 1996)。初期の研究には1990年代に発表された状態自尊感情 (state self-esteem) の研究があり (e.g., Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993; Kernis, Grannemann, & Barclary, 1989)、2000年前後になると自己価値の随伴性 (contingencies of self-worth) の研究 (e.g., Crocker & Wolfe, 2001) や意識と非意識の自尊感情の不一致に関する研究 (e.g., Jordan et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006) へと発展している。そして、Goldman (2006) では、脆く高い自尊感情の特徴を、(1) 状態的に不安定であること、(2) 特定の領域の結果に依存・随伴していること、(3) 潜在的自尊感情と乖離していること、(4) 否定的な自己イメージを受け入れない防衛性があること、以上の4点からまとめている。

脆く高い自尊感情は、低い潜在的自尊感情を受け入れることへの抵抗から顕在的自尊感情を高く報告している可能性が指摘されており、その特徴が防衛的・自己陶酔的であることから、防衛的な高い自尊感情 (defensive high self-esteem) とも呼ばれている (e.g., Jrodan et al., 2003; Jordan & Zeigler-Hill, 2013)。脆く高い自尊感情の者は、顕在的自尊感情が不安定で短期的に変動しやすいこと (Zeigler-Hill, 2006)、自己愛傾向 (narcissism) や内集団バイアス (in-group bias) が高まりやすいこと (Jrodan et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006)、孤独感が高まりやすいこと (Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers, 2013)、怒りの制御、抑うつ、緊張感、健康状態の悪化日数を増加させること (Schröder-Abé, Rudolph, & Schütz, 2007) が明らかにされている。子どもを対象とした研究においても、教師に対してより攻撃的な様子が目立つことが報告されている。(Sandstrom & Jordan, 2008)。

脆い自尊感情の研究では、顕在的自尊感情だけを見れば数値が高いためか、精神的健康への負の関連は現れにくく、対人関係や適応行動上の問題の方が多く指摘されている。一方、問題行動は他者からの批判やストレス事象を増加させるため、顕在的自尊感情も不安定であり、長期的にみると精神的健康に対しても負の影響が現れてくるのだと考えられる。

生徒指導や教育相談では、とりわけ、脆い自尊感情のアセスメントに注意したい。現在の学校教育では質問紙やアンケートで顕在的自尊感情をアセスメントする方法が主であり、その得点が低いことは問題視されるが、高い場合は良好な状態にあると見立てられることが多いだろう。高い顕在的自尊感情の児童生徒のなかに含まれる、低い潜在的自尊感情の子どもたちを適切に見立てていくことが、自尊感情や自己肯定感の教育では重要になる。

#### (5) 傷ついた自尊感情 (Damaged self-esteem)

顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の不一致に関する研究には、不一致の大きさと方向性に着目した分析方法 (size direction approach) もある。この方法では、目的変数に対して脆い自尊感情と傷ついた自尊感情のどちらの方向がより影響が強いのか、そして、その不一致の大きさがどの程度の影響力を持つかが検討される。この方法を用いた研究では、抑うつや不安に対しては、脆い自尊感情 (顕在 > 潜在) よりも傷ついた自尊感情 (顕在 < 潜在) からの影響が大きい可能性が示されている (e.g., Creemers et al., 2013)。

例えば、Leeuwis, Koot, Creemers, & van Lier (2015) では、11歳の子どもたちを対象に1年間の縦断研究を行い、いじめ被害経験が内面化の問題 (情緒や仲間関係) に及ぼす影響に対する自尊感情の不一致の観点から媒介効果を検討している。その結果、11歳時点の傷ついた自尊感情は、11歳時点と12歳時点の両時期における内面化の問題の増加と関連しており、また、11歳時点のいじめ被害から12歳時点の内面化の問題の増加に対して媒介効果があると示されている。つまり、傷ついた自尊感情のパターンの子どもたちは、いじめ被害を受けたとき、将来的に情緒や仲間関係といった内面化の問題を増加させやすいことが示唆されている。

他にも、Creemers et al. (2013) の研究では、20歳前後の健康な女性を対象に、不一致の大きさと方向性に注目して、抑うつ症状、自殺念慮、孤独との関連を検討している。ここでは、脆い自尊感情は孤独のみを増加させているが、傷ついた自尊感情は抑うつ、自殺念慮、孤独を増加させることが明らかにされている。また、脆い自尊感情のレビューで紹介した Schröder-Abé et al. (2007) の研究は、脆い自尊感情で確認された怒りの制御、抑うつの強さ、緊張感、健康状態の悪化日数の増加は、傷ついた自尊感情でも確認されると報告しており、各健康指標の状態を比較すると、傷ついた自尊感情の方が悪い状態であることが分かる。

最も低年齢を対象として研究としては、Cvencek らのものが挙げられる。Cvencek らは、就学前の4歳児や5歳児を対象とした就学前 IAT (Preschool Implicit Association Test, Cvencek, Greenwald, & Meltzoff., 2011; Cvencek, Greenwald, & Meltzoff., 2016) を作成し、5歳時点から9歳時点までの期間で潜在的自尊感情の縦断研究を行っている (Cvencek, Greenwald, McLaughlin, & Meltzoff, 2020)。この研究においても不一致のサイズと方向性から検討が行われおり、9歳時点の傷ついた自尊感情が抑うつを増加させているだけでなく、5歳時点の潜在的自尊感情と9歳時点の顕在的自尊感情の不一致 (潜在 > 顕在) も抑うつを増加させており、その関連は9歳時点の横断的なものよりも強かったと報告している。この現象について Cvencek et al. (2020) は、子どもが幼稚園・保育園から小学校に移行するにつれて社会的比較に依存し始め、自己評価が肯定的ではなくなること (e.g., Cvencek, Fryberg, Covarrubias, & Meltzoff, 2018) を理由として、抑うつが高まる可能性に言及している。

この年齢の発達段階では、過去・未来に対する時間的展望や、周囲との相対的比較に関する認知的発達が進み始める発達段階であるとともに、社会的比較や競争を経験する頻度も多くなる。幼少期に高い潜在的自尊感情が形成されていたとしても、こうした認知的発達や環境要因からの影響を受けて、顕在的自尊感情の低下という側面から精神的健康が悪化するのかもしれない。これは、近年の小1プロブレムや中1ギャップの現象を説明する観点であるとも考えられる。一方、子どもを対象とした潜在的自尊感情の研究は数が少ないため、今後の研究蓄積によって詳細に明らかにされていくことが期待される。

なお、自尊感情の不一致の研究知見を解釈する上で注意すべき観点もある。この研究デザインでは、目的変数 (抑うつ等) の指標が質問紙で測定される場合、潜在的自尊感情よりも、同じ意識的プロセスで測定される顕在的自尊感情と比較的に関連が示されやすくなると考えられる。傷ついた自尊感情の研究では、潜在的自尊感情が高い場合でも、顕在的自尊感情が低い場合は抑うつが高いという知見が多く報告されているが、その結果に上記の課題がどの程度影響しているのか、念頭に置いて解釈することが求められる。他にも、日本特有の問題も考えられる。質問紙による自尊感情の測定の問題は第8節で詳述するが、日本人は、謙虚な姿勢から顕在的自尊感情を低く回答する傾向があるため、こうした文化的要因から、海外の研究が再現されない可能性もある。国内での再現性の確認や研究知見



の蓄積も重要な課題である。

以上の知見が、第5節で言及した「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」の第3の特徴である「意識と無意識の自己肯定の一致」に関する研究群の一部である。生徒指導・教育相談においても、潜在的自尊感情のアセスメントは欠かせない視点と考えられ、その測定法として近年注目されているのが IAT である。次節では、IAT の方法論、信頼性、妥当性に関する知見をまとめる。

## 7. 潜在連合テストとは

### (1) 潜在連合テストとは

Implicit Association Test (Greenwald & Banaji, 1995) は、日本では「潜在連合テスト」あるいは「IAT」の名称で呼ばれる。IAT にはパソコン版 (Greenwald & Banaji, 1995) と紙とペンを使って行う紙筆版 (e.g., 潮村, 2015) がある。パソコン版 IAT では画面上に連続して提示される刺激 (絵や写真, イラスト, 言葉など) を左右の指定された方向にキーボード操作で分類していくという課題を与え、分類時の刺激への反応時間を測定することで潜在的態度を測定する。紙筆版 IAT では、制限時間以内に紙面上に並べられた刺激を左右の指定された方向にペンでチェックをつけるといった方法で分類していく課題を与え、制限時間内にいくつの刺激を分類することができたか、分類した刺激の個数 (課題遂行量) から潜在的態度を測定する。

IAT で設定される刺激は、測定対象の概念を表す刺激 2 種類 (カテゴリ刺激と呼ばれることもある) と属性を規定する刺激 2 種類が設定される。例えば、社会心理学などで扱われている人種に対する偏見を測定する IAT (e. g., Dasgupta, McGhee, Greenwald, & Banaji, 2000) では、カテゴリ刺激に「白人」と「黒人」の複数人の顔写真が刺激として用いられ、属性刺激には「快 (pleasant)」と「不快 (unpleasant)」を表現する複数の言語刺激が用いられる。IAT は 2 つの対となるカテゴリ刺激と属性刺激の潜在連合の強度を対比的に測定する方法であり、2 つの概念を対比しなければならないことが方法論上の制約でもある。

IAT の分類課題では、カテゴリ刺激と属性刺激を組み合わせて、「白人と快」(右) かつ「黒人と不快」(左) に分ける課題 A と、「黒人と快」(右) かつ「白人と不快」(左) に分ける課題 B を行う。白人を好み黒人を嫌っている者の場合、課題 A は本人の潜在的態度と一致しているため課題 B よりも反応時間が早く (課題遂行量が多く) なる。逆の潜在的態度を持っている場合は課題 B の方が反応時間が早く (課題遂行量が多く) なる。そして、測定した反応時間や課題の遂行量の得点化は、課題 A から課題 B を減算して得点化を行う (測定概念の意味に応じては逆で行う場合もある)。そのため、得点の解釈は、得点が高いほど白人を好み黒人を嫌っており、得点が低いほど白人を嫌い黒人を好んでいるとなる。なお、パソコン版 IAT では、手法そのものが測定値に及ぼす影響である方法特殊性分散

(method-specific variance) を最小限にするために、課題 A と課題 B の差を、両課題全体の反応時間の標準偏差で除した D スコアを算出するという方法をとっていることも付記する (e.g., Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003; Mierke & Klauer, 2003)。

## (2) 潜在連合テストの信頼性と妥当性

IAT は他の潜在的測定法と比べて信頼性と妥当性が高いことが示されている。例えば、Bosson, Swann, & Pennebaker (2000) は 7 種類の潜在的自尊感情を測定する測定法の信頼性を比較し、なかでも IAT が比較的の高い再検査信頼性を示す ( $r = .69$ ) と報告している。また、Hofmann, Gawronski, Gschwender, Le, & Schmitt (2005) は 50 の研究のメタ分析により、IAT の平均的な  $\alpha$  係数が .79 と良好であったことを報告している。妥当性に関しては、Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald (2007) で基準関連妥当性に関する知見が紹介されている。

さらに、認知神経科学の研究でも IAT の妥当性が示されている。例えば、Phelps らの研究では、「黒人」と「白人」に対する潜在的な選好を測定する IAT と脳の扁桃体の活動との関連を検討しており、黒人の顔写真を見せたときに扁桃体の活動が強い者ほど、IAT で測定される黒人に対するネガティブな潜在的態度が強かったと示している (Phelps, O'Connor, Cunningham, Funayama, Gatenby, Gore, & Banaji, 2000)。

また、Izuma らの研究では、自己の顔を受動的に視聴したときの脳の活動を fMRI で測定し、その際の脳の報酬系領域 (reward-related brain regions) の神経活性パターンと、潜在的自尊感情を測定する IAT の得点及び顕在的自尊感情を測定する RSES の得点の関連を検討している。その結果、RSES の得点は脳の報酬系領域の活動と関連がみられなかったが、IAT の得点とは正の関連が認められたと報告している (Izuma, Kennedy, Fitzjohn, Sedikides, & Shibata, 2018)。なお、報酬系の脳領域は、人間にとって報酬となり得るものを意味づける脳内の情報処理過程であり、報酬と意味づけられた刺激は、快感を生じさせたり、学習の強化子となったり、意思決定や目的志向的行動に関連する脳領域である (筒井・渡邊, 2008)。

## 8. 質問紙と潜在連合テストによるアセスメントの留意点

### (1) 議論の整理

第 5 節において、ありのままの自分を肯定する自己肯定感の概念的特徴について、①その肯定感に関する感情的特徴が自己信頼や自己受容、本来性 (本来感) であること、②他者との良好な関係を基盤とし、他者信頼を伴うものであること、③意識と無意識の自己肯定が一致していること、これら 3 点を論じた。

本節では、この観点に依拠しながら、現状の質問紙と IAT の方法論上の問題についてまとめる。③の特徴は、質問紙と IAT を組み合わせるなど、多面的・重層的に検討されるこ

とが望ましいため、本節の議論の中心は①と②の特徴に関する議論になる。どのような心理検査も必ず何かしらの欠点や限界があるため、方法論上の問題をよく理解し、測定された数値を丁寧に読み解いていくことが求められる。

## （２）質問紙の留意点

冒頭でも示したとおり、現在、教育関連の領域で使用される自尊感情質問紙は、RSESの影響を受けたものが多い。そのため、質問紙による自尊感情測定の留意点はRSESの研究からみることができる。RSESは、Rosenberg (1965) の定義とともに、good enoughの自尊感情を測定する尺度として使用されることがある。しかし、現在では、肯定的態度に関する感情的特徴は測り分けることができない尺度であると指摘されている（e.g., 山崎他, 2017）。特に否定的な表現の項目（e.g., “At times, I think I am no good at all.”）については、国によって解釈の差が大きい可能性が示されている（Schmitt & Allik, 2005）。

日本では、伊藤らの研究が実証的に検討している。伊藤・小玉（2005）の研究では最適な自尊感情の中核的な特徴とされる本来性の感情的側面を本来感（sense of authenticity）と定義し、それを測定する尺度を作成している。そして、RSESが測定する自尊感情の成分と本来感の比較検討を行っている。この研究では、本来感尺度とRSESはそれぞれ自律性と正の関連にあるが、両尺度の共通成分を統制して自律性への関連をみると、本来感尺度は自律性と正の関連、RSESは自律性と負の関連になることが明らかにされている。さらに、伊藤・川崎・小玉（2011）では、RSES、本来感尺度、随伴性自尊感情（優越感）の3指標の関連を分析しており、RSESは本来感を統制すると優越感と正の関連、優越感を統制すると本来感と正の関連が示される。また、本来感と優越感の関連もRSESを統制すると消失することが示されている。こうした結果から、RSESは本来感や優越感といった自己肯定に関するさまざまな感情的特徴を全般的に測定する尺度であることが明らかにされている。また、子ども用RSESについても、同様に全般的な自尊感情が測定されていると指摘されている。（横嶋・内山・内田・山崎, 2020）。

他にも、RSESの回答にはさまざまな傾向がある。例えば、RSESの質問項目への回答理由を調査した研究では、質問項目に対して、そのように（自分に満足していない）考えたくない、そう考えるのが嫌だと、防衛的な理由で得点を高くつける者や、現状に満足していたら今後の成長が望めないと謙虚な姿勢で得点を低くつける者がいることが報告されている（田中・上地・市村, 2003）。他にも、RSESには、社会的に望ましい姿を見せたいと反応してしまう社会的望ましさ（social desirability）が影響することも明らかにされている。社会的望ましさは、自己欺瞞（self-deception）と印象操作（impression management）に大別されるが、特に、RSESは自己欺瞞と正の関連があると示されている（谷, 2008）。

質問紙法は、質問項目の問いに基づいて自己の心理を内省し、5件法や4件法で段階的に判断して回答する方法であるため、意識的な判断に基づく自己への肯定的評価が測定さ

れていると考えられている (Baumeister et al., 1996)。その判断は文化・個人によって多種多様であるため、全般的に測定されるのであろう。質問紙やアンケートによる自尊感情の測定では、全般的な自尊感情が測定されている可能性を考慮しなければならない。そのため、「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」をアセスメントしていくためには、質問紙単体を使うのではなく、他の方法と組み合わせながら使用することが望ましいといえる。

### (3) IAT の留意点①：カテゴリ刺激の「他者」刺激からの影響の問題

IAT の留意点に関する議論は、刺激構成の設計に関する留意点である。議論は大きく分けて2点であり、第1にカテゴリ刺激の設定、第2に属性刺激の設定についてまとめる。ここで議論される内容は、他の研究者も指摘している内容ではあり、それを考慮する研究や考慮しない研究と研究上のスタンスもさまざまである。しかし、「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」としてのアセスメントに使用する場合は、考慮されることが望ましい観点であると考えられる。

第1に、カテゴリ刺激に関する議論である。潜在的自尊感情を測定する IAT は、カテゴリ刺激に「自分」だけでなく「他者」を設定する方法が多い (e.g., Greenwald & Farnham, 2000; 小塩・西野・速水, 2009)。一方、この刺激構成の場合、潜在的自尊感情得点に「他者」への潜在的態度が反映されることが明らかにされている (Karpinski, 2004)。

Karpinski (2004) の研究では、潜在的自尊感情を測定する2種類の IAT を作成し、「他者」刺激が得点に与える影響を比較している。そこでは、「他者」刺激に「サンタクロース」を用いた IAT と、ナチス・ドイツの「アドルフ・ヒトラー」を用いた IAT が使われており、2つの IAT の得点を比較したところ、ヒトラー刺激を使用した IAT の方がサンタクロースの刺激を使用した IAT よりも得点が高くなることを報告している。つまり、「他者」として設定された刺激に対して不快感・嫌悪感が強い場合、得点も高くなるということである。そのため、「自己」と「他者」の対刺激で構成される自尊感情 IAT は、自分に肯定的かつ他者に否定的なほど得点が高くなり (逆の場合は得点が低くなり)、他者との比較という性質が強い潜在的自尊感情が測定されていると考えられる (横嶋, 2019)。同様の現象は潮村・村上・小林 (2003) においてもレビューされており、小塩他 (2009) の研究ではこのタイプの IAT は他者軽視と正の関連があると示されている。

先述の「黒人と白人」IAT のところでも説明したように、IAT は対となる概念のどちらかを潜在的に選好しているのか測定する方法である。「自己」と「他者」を対にした IAT を用いる場合は、潜在的自尊感情の高低というよりも、「潜在的に自分と他人どちらをより好んでいるのか」という観点で得点を解釈することが妥当である。

さらに、この方法では、潜在的自尊感情が持つ精神的健康や適応行動への効果を過少評価してしまう可能性もある。Phelps et al. (2000) の研究から推論すると、他者刺激と不快刺激の潜在連合が強い場合、他者と接する際に比較的に扁桃体が賦活しやすく、ストレス反

応が高まりやすい状態にあると考えられる。つまり、「自己」と「他者」を対にする IAT の高群における「自己肯定」の成分は不安やストレスを低減するが、「他者否定」の成分はそれを増加させる要因となるため、総じて、不安やストレスへの関連は小さくなってしまう可能性が危惧される。

また、とりわけ注意が必要なのは、教育的支援の効果検証への使用である。「自己」と「他者」を対にした IAT は、教育前後で得点が有意に上昇しても、それが自己への肯定的な潜在的態度が強まったことで上昇したのか、他者への否定的な潜在的態度が強まったことで上昇したのか、判別することができない。他者否定を高めるような教育的支援は論外であるため、それが強まった可能性が含まれてしまうと、効果検証以前の問題として教育的支援の適切性から疑問視しなければならなくなる。効果検証への活用の際には、IAT の制約と得点の解釈に注意しなければならない。

一方、こうした IAT の制約を回避する方法として、Go / No-go Association Test (以下、GNAT, Nosek & Banaji, 2001) が発表されている。GNAT は、生理心理学や認知心理学などの領域で使用される Go / No-Go 課題を IAT に適用したものであり、単一のカテゴリ刺激に対する潜在的態度を測定することが可能である。研究のターゲットとなる情報が単一で明確であり、一貫した研究知見が得られやすいという理由から、精神医学の領域では GNAT を積極的に選択している研究もある (e.g., Romero et al., 2016)。他の方法では、単一のカテゴリで測定できる single category IAT (Karpinski & Steinman, 2006) や、比較的快や不快の潜在連合が少なく、測定される得点に影響が出にくい「指示語」(e.g., it, that, あれは, それは) をカテゴリの対刺激に用いる方法もある (e.g., Jrodan et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006; 横嶋・内山・内田・山崎, 2017)。特に、「指示語」は紙筆版 IAT への適正が高い(横嶋, 2019)。

しかし、この方法は対刺激からの影響をゼロあるいは軽減するやり方であるため、自律的自尊感情(山崎他, 2017)など、自己信頼と他者信頼がともに高いことで規定される自尊感情概念の測定には不十分であると指摘されている(山崎・横嶋・賀屋・内田, 2019)。また、その指摘の改善を試みた自律的自尊感情 IAT の開発研究も存在する(横嶋, 2022a)。自律的自尊感情 IAT にも研究上の問題や限界は散見されるが、自律的自尊感情の研究・教育への使用という目的では方法論の 1 つとして活用可能性があると考えられる。

なお、うつ病への予測力という意味では、「自己-他者」IAT のメリットを指摘する声もある。Steinberg et al. (2007) では、自己と比較して他者に対して強い肯定的な態度を持つということは、日々の対人関係で起こる否定的なライフイベントに反応しやすくなり、うつ病に対してより脆弱になると述べている。そのため、むしろ、「自己-他者」IAT はうつ病の予測因子として高いパフォーマンスを発揮する可能性があるかと論じている。

#### (4) 留意点②：属性刺激で測定される自尊感情の感情的特徴が変化する

第 2 に、属性刺激に関する議論である。自尊感情 IAT の属性刺激は研究者によって大き

く異なる。そして、異なる属性刺激を用いた自尊感情 IAT 同士の相関は低く、あるいは関連がなくなることが報告されており (e.g., Greenwald & Farnham, 2000; 潮村他, 2003), 設定される属性刺激によって、測定される潜在的自尊感情の性質も異なると考えられる。

測定されている潜在的自尊感情の性質の検討は、いわば構成概念妥当性の検討ということになる。質問紙尺度の開発では、構成概念妥当性の初期の手続きとして尺度項目の内容的妥当性の検討が行われる。IAT や GNAT では、カテゴリ刺激と属性刺激が測定概念の性質を決定するため、測定したい構成概念の理論に基づいて、少なくとも刺激の内容的妥当性の確認を行う手続きを踏むことが望ましい。

内容的妥当性の観点において、属性刺激は、自己への肯定的あるいは否定的な態度の感情的特徴を決定する要素として検討することになる。例えば、快刺激を「幸せ」、不快刺激を「不幸」に関連する言語刺激で構成した場合、自尊感情というよりも幸福感を潜在的に測定している IAT と解釈することが妥当であろう。そのため、教育や研究で扱いたい自尊感情の様態や概念理論を考慮して刺激語の設定を行い、内容的妥当性の検討を行うことが望ましい。そして、当然ながら、他の観点からも妥当性の確認を行うことが求められる。

最後に、刺激構成の例として横嶋他 (2017) の紙筆版の自尊感情 IAT の刺激構成を紹介する (Table 1)。まず、カテゴリ刺激は、紙筆版 IAT であるため Jordan et al. (2003) で採用されている「指示語」を使用し、対刺激からの潜在的自尊感情得点への影響を軽減している。一方で、教育現場で児童生徒一人一人にパソコン等の端末を準備できる場合は、測定の正確さや得点集計の手間などを考慮すると、GNAT の使用が推奨される。次に、属性刺激は「自己受容」「自己信頼」という特徴を持った自尊感情を測定することを考慮して設定されている。

Table 1 横嶋他 (2017) の紙筆版自尊感情 IAT の刺激語構成

カテゴリ語		属性語	
自分	自分以外	良い	悪い
じぶんは	あれは	すきだ	きらいだ
わたしは	それは	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

横嶋他 (2017) の刺激構成は「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」に近い概念をアセスメントするための IAT の構成として1つの選択肢になると考えられる。しかし、こうした概念理論は今後の研究で深められるべきところであり、同時に、より適した刺激語が導出されることも期待される。願うところは、児童生徒の心の成長につながる教育研究の進歩のため、より適した知見が導出され、発展していくことである。

かなり飛躍した見解かもしれないが、例えば、逆制止の原理に基づいた属性刺激の設定なども考えられる。逆制止の原理では恐怖や不安といった感情はその感情に拮抗する反対の感情（リラックス）によって低減あるいは消去されるとあり、それを利用した系統的脱化学法という行動療法がある。リラックス等の肯定的な感情的特徴と自己の潜在連合が強い場合が、最も精神的健康によい潜在的自尊感情を表現しているのかもしれない。また、“ありのままの自己を肯定的に捉えられている感覚”としても適しているかもしれない。刺激語に関する議論や研究についても今後の発展が期待される。

## 9. 学校教育における自尊感情・自己肯定感のアセスメント

### (1) 学校教育でアセスメントが必要になる場面

最後に、学校教育における自尊感情・自己肯定感の具体的なアセスメント方法についてまとめる。心理検査はどのようなものであっても 100%の精度で測定できる方法は存在しない。各方法の特徴と問題点を理解し、欠点を補う他の方法と組み合わせながら、目的に合わせて活用していくことが求められる。自尊感情の場合も同様である。

心理臨床の現場において、クライアントを多面的、重層的に理解するために、多くの場合が複数の方法を組み合わせて（テスト・バッテリーを組んで）検査が行われることは、先述のとおりである。再掲すると、多面的とは、知能や性格特性などを多面的に理解することを指し、重層的とは意識から無意識までを捉えていこうとすることを指す。本節では、本論文のテーマに合わせて、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感」を多面的・重層的にアセスメントするための具体的な観点と方法を論じる。

また、生徒指導・教育相談でアセスメントを必要とする場面は、大きく3つであると考えられる。1つ目は学校全体・学級・個人の自尊感情の実態のアセスメント、2つ目は学校で行われている自尊感情への教育的支援の効果検証への使用、3つ目は基礎研究への使用である。主に1つ目と2つ目の目的で使用されることが多いと考えられるため、ここでは主にこの2つの場合を想定して論じることとする。

### (2) 質問紙を組み合わせてアセスメントする場合

まず、自尊感情の質問紙尺度と他の心理尺度を組み合わせるパターンである。現状、このパターンが最も利用可能性が高いといえる。留意点は、自尊感情の質問紙尺度だけでは、脆い自尊感情（顕在>潜在）を弁別して見立てられないことである。そのため、潜在的自尊感情が低い可能性に気づけるように、自尊感情以外の心理検査と組み合わせて見立てることが効果的である。

一例としては、嶋田・戸ヶ崎・坂野（1994）のストレス反応尺度や学級満足度や学校生活意欲が測定できる Q-U (Questionnaire Utilites, 河村, 田上, 1997) などが考えられる。質問

紙で測定した顕在的自尊感情は高いが、同時に高いストレス反応（特に、高い攻撃性）がみられたり、学級満足度における承認得点が低かったり、被侵害得点が低かったりするようであれば、脆い自尊感情といわずとも、何らかの問題を抱えた高い顕在的自尊感情が形成されていると推察できる。そして、潜在的自尊感情が低いという可能性への気づきを得られる。自尊感情以外の観点から児童生徒の健康・適応をアセスメントすることも可能であり、その点においても健康・適応の変数と組み合わせたアセスメントは効果的といえる。

教育の効果検証においても、同様の観点でアセスメントを行うこと方向性が考えられる。効果検証では、心理教育や教育的支援を実施した前後で自尊感情の測定を行い、測定得点が前後で上昇したかどうか統計的に検定することになる。しかし、先述のとおり、自尊感情尺度の得点だけが上昇したとしても、それが脆い自尊感情の高まりである可能性が含まれてしまうため、「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」が育まれたと判断することは難しい。そこで、先述と同様に他の尺度と併用して効果検証を行い、多面的・重層的に教育効果を検討することが求められる。

また、伊藤・小玉（2005）の本来感尺度の使用も候補に挙がってくる。しかし、この尺度は成人用であり、特に児童用として標準化手続きを行っている研究が見当たらない。RSESと同様に本来感尺度の項目も抽象性が高い内容となっているため、質問項目の意図を児童生徒がどの程度理解できるのかといった確認も含めて、信頼性や妥当性の検証を経て使用されることが望ましいだろう。

### （3）教育臨床的視点からアセスメントする場合

次に、教師の主観や経験則と組み合わせる方法である。主観や経験則で児童生徒の潜在的自尊感情を見立てることが難しいことは言うまでもないが、顕在的自尊感情に対しても、「あの子は自信があるかどうか」というように直接的に見立てることは難しいとされる。

例えば、須崎・兄井（2013）の研究では、「自分自身を価値あるものとして評価し信頼する感覚を持っている子どもですか」という指標を用いて担任教師が個々の児童生徒の評定を行い、児童生徒の自尊感情尺度（児童用 RSES）との相関を調べている。その結果は、小学生4年から6年生で中程度の正の相関（ $r = .44, p < .01$ ）、中学生で弱い正の相関（ $r = .15, p < .05$ ）であり、学級担任制の小学校の教師でも正しく見立てることは難しく、中学校の担任教師ではほとんど当たらないことが予想される。この研究では、児童も教師もどちらの測定指標においても、自己肯定に対する感情的特徴や自尊感情の様態を弁別する基準が存在しないため、それぞれ異なる自尊感情の成分が測定されてしまったことで関連が低くなった可能性も考えられる。しかし、どちらにしても、抽象性の高い他者の心理特性を主観や経験則から直接的に見立てるという試みは、教職員の価値観や信念が大きく反映されるため、生徒指導提要（2022）でも指摘されているようになるべく避けるべきであろう。

一方、ここで行いたいのは教師の主観や経験則が当てにならないという議論ではない。



教師は日々の児童生徒の観察から見立てを行える貴重な立場にある。抽象性の高い観点で評価するのではなく、なるべく具体的な視点で、現実の児童生徒の様子に基づいたアセスメントを行うことが効果的であるといえる。その1つとして、教師に求められる臨床的視点に「言葉化」「行動化」「身体化」の3つの「聴く」から児童生徒理解を深めるという考えがある(高垣, 2011)。言葉は相談や日記交換など児童生徒がアウトプットした言葉から、行動は学校生活や家庭における児童生徒の行動の様子から、身体は腹痛や頭痛などの日常的にみられる軽微な不調から、それぞれ児童生徒の心理面を多面的・重層的にアセスメントするという視点である。

自尊感情の見立てに応用する場合は、児童生徒の日々の様子を観察するなかで、「言葉化」される児童生徒の自信と、「行動化」「身体化」に現れる健康・適応と組み合わせて、児童生徒の自尊感情の様態を推測する方法が考えられる。例えば、横嶋他(2017)では、児童(4年生から6年生)の潜在的自尊感情と、学級担任が行った潜在的自尊感情の高低に起因する行動特徴の児童評定との関連が検討されている。そこでは、潜在的自尊感情が高い児童は、低い児童と比べて、学級担任に不安や攻撃性が低く、自律性が高いと評定される傾向にあることが明らかにされている。そこでの評定指標は次のとおりである。

1つ目は不安の項目であり、「友だちや先生の目を気にすることが多い(補足説明: 不安な感情から周囲の目を気にしやすいかどうか)」となっている。2つ目は攻撃性の項目であり、「友だちに対して、気分を害することが良くある(補足説明: 友だちに対する嫌悪や怒りなど、攻撃的な気持ちを抱きやすいかどうか)」となっている。3つ目は自律性の項目であり、「周りに流されず、やりたいことを楽しそうにやっていることが多い(補足説明: 一人であっても、友だちといっても、主体的に自分のやりたいことができているかどうか)」となっている。こうした特徴が高く、かつ「言葉化」においても自信のある様子が伺えているならば、意識と無意識の両面で良好な自尊感情の状態である可能性が高いだろう。

また、こうした評定を正確に行うためには、教師自身が対象児童生徒に抱く印象などのバイアスに左右されないように留意しながら、なるべく日々の行動の様子を具体的に想起することが求められる。複数の教師と具体的な行動の様子について情報交換をし、行動記録まとめるなどによって、正確な情報抽出に努めることも効果的であろう。教師は児童生徒の行動を学校という社会のなかで観察できる貴重な立場にあり、児童生徒理解(アセスメント)のための貴重な情報を集めることができる。教師一人一人が児童生徒の行動観察の視点を養うことが、チーム学校としての深い児童生徒理解への達成を促すといえる。

#### (4) 質問紙と IAT を組み合わせてアセスメントする場合

最後に、質問紙と IAT の組み合わせて見立てる場合である。自尊感情をターゲットとして重層的に見立てるという意味では、最も直接的な組み合わせになるだろう。その結果を読み解くための基礎知識としては、第6節の基礎研究群の情報が役立つと考えられる。

一方で、児童生徒を対象とした潜在的自尊感情の研究は、近年増えつつあるものの (e.g., Rae & Olson, 2018), 成人期と比べると数が少なく、日本国内ともなると研究数は限定されてしまう。特に、年齢が下がるほど正確な測定を行うために特別な配慮や手続きが必要になるため (e.g., Cvencek et al., 2011; Cvencek et al., 2016), 現状では、教育現場でも活用しやすい測定法の開発が待たれる状況である。そうしたなかでも、一部の先行研究は、タッチパネルで操作できるタブレットタイプの IAT が学校現場で活用できる可能性を示している (横嶋・大上・賀屋・山崎, 2020)。低年齢の子ども用の IAT では、キーボード操作の代わりにタップして操作できる大きなボタンが用意されているが (e.g., Cvencek et al., 2011), これらの研究から 10 年以上が経過した近年では、幼児期からスマホやタブレットに馴染んでいる子どもも多く、特別な機材を準備するよりも抵抗が少なく直感的に操作できると考えられる。また、小学校低学年用 (1・2 年生) の紙筆版 IAT の開発も予備研究段階ではあるが進められている (横嶋・野口・賀屋・山崎, 2021)。低年齢の子どもを対象とした研究の可能性も開拓されつつあるため、多くの研究者による今後の研究の発展が期待される。

一方で、繰り返すようだが、質問紙も IAT も 100%の精度で個人のアセスメントが行える測定法ではない。また、自尊感情や自己肯定感は、生徒指導や教育相談で重要視される心理的側面ではあるが、生物心理社会モデルにあるように、児童生徒の諸問題は多様な要因から発生する。「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」を見立てるだけでなく、総合的な児童生徒理解を深めるためにも、他の心理検査や、教師と生徒の日々の交流 (様子の観察)、学校の支援チームでの情報交換、家庭や地域などの学校外との連携など、なるべく多角的な情報を集め、総合的に見立てていくことが重要であると考えられる。

## 10. おわりに

本論文では、文部科学省 (2022) で示された「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」の概念に関する議論と、心理検査を用いたアセスメントをテーマとして論じてきた。今回は上記のテーマに絞って論じてきたため、生徒指導・教育相談におけるどのような支援・指導が児童生徒のこうした自己肯定感を育むことができるのかといった観点については触れることができなかった。

児童生徒を対象とした潜在的自尊感情 (自律的自尊感情) への教育的介入の研究は数が少ないが、賀屋 (2021) や横嶋 (2022b) において研究事例があるため、付記しておきたい。一方、潜在的自尊感情と顕在的自尊感情のバランスの観点では、各発達段階に応じて、どのようなバランスが児童生徒の精神的健康や適応行動にとって効果的なのか、発展途上の研究テーマであり、研究余地が多く残されている。また、潜在と顕在のバランスが取れた「ありのままの自分を肯定する自己肯定感」の育成を効果的に行う教育的支援の在り方に関する研究も、学校教育を発展させる上で重要なものになるだろう。とりわけ、生徒指導・

教育相談は、日常的な教育の全体を通して行われるものであるため、日々の教育の中で教師が行える効果的な支援・指導の方法を整理していくことも大切である。各テーマに関する今後の基礎研究の蓄積を待ちながら、そのエビデンスを柔軟かつ適切な方法で学校教育に取り入れていくことが求められる。

## 文献

- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44. <https://doi.org/10.1111/1529-1006.01431>
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.103.1.5>
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. Guilford press.
- Beck, A. T., Steer, R. A., & Brown, G. (1996). *Beck depression inventory-II*. Psychological assessment. <https://doi.org/10.1037/t00742-000>
- Beevers, C. G. (2005). Cognitive vulnerability to depression: A dual process model. *Clinical psychology review*, 25, 975-1002. <https://doi.org/10.1016/j.cpr.2005.03.003>
- Bosson, J. K., Swann, W. B., Jr., Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631-643. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.79.4.631>
- Buhrmester, M. D., Blanton, H., & Swann, W. B., Jr. (2011). Implicit self-esteem: Nature, measurement, and a new way forward. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100, 365-385. <https://doi.org/10.1037/a0021341>
- Buhlmann, U., Teachman, B. A., Gerbershagen, A., Kikul, J., & Rief, W. (2008). Implicit and explicit self-esteem and attractiveness beliefs among individuals with body dysmorphic disorder. *Cognitive therapy and research*, 32, 213-225. <http://dx.doi.org/10.1007/s10608-006-9095-9>
- Butler, A. C., Hokanson, J. E., & Flynn, H. A. (1994). A comparison of self-esteem lability and low trait self-esteem as vulnerability factors for depression. *Journal of personality and social psychology*, 66, 166-177. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.66.1.166>
- Creemers, D. H., Scholte, R. H., Engels, R. C., Prinstein, M. J., & Wiers, R. W. (2013). Damaged self-esteem is associated with internalizing problems. *Frontiers in psychology*, 4, 152-159. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2013.00152>
- Crocker, J., & Wolf, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, 108, 593-623. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.108.3.593>

- Cvencek, D., Fryberg, S. A., Covarrubias, R., & Meltzoff, A. N. (2018). Self-concepts, self-esteem, and academic achievement of minority and majority north American elementary school children. *Child development, 89*, 1099-1109. <https://doi.org/10.1111/cdev.12802>
- Cvencek, D., Greenwald, A. G., & Meltzoff, A. N. (2011). Measuring implicit attitudes of 4-year-olds: The preschool implicit association test. *Journal of Experimental Child Psychology, 109*, 187-200. <https://doi.org/10.1016/j.jecp.2010.11.002>
- Cvencek, D., Greenwald, A. G., & Meltzoff, A. N. (2016). Implicit measures for preschool children confirm self-esteem's role in maintaining a balanced identity. *Journal of Experimental Social Psychology, 62*, 50-57. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2015.09.015>
- Cvencek, D., Greenwald, A. G., McLaughlin, K. A., & Meltzoff, A. N. (2020). Early implicit–explicit discrepancies in self-esteem as correlates of childhood depressive symptoms. *Journal of Experimental Child Psychology, 200*, 1-19. <https://doi.org/10.1016/j.jecp.2020.104962>
- Dasgupta, N., McGhee, D. E., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2000). Automatic preference for White Americans: Eliminating the familiarity effect. *Journal of Experimental Social Psychology, 36*, 316-328. <https://doi.org/10.1006/jesp.1999.1418>
- De Raedt, R., Schacht, R., Franck, E., & De Houwer, J. (2006). Self-esteem and depression revisited: Implicit positive self-esteem in depressed patients? *Behavior Research and Therapy, 44*, 1017-1028. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2005.08.003>
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.31-49). New York: Plenum. [https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-1-4899-1280-0\\_3](https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-1-4899-1280-0_3)
- 古荘純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか — 児童精神科医の現場報告 — 光文社
- Goldman, B. M. (2006). Making diamonds out of coal: The role of authenticity in healthy (optimal) self-esteem and psychological functioning. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers* (pp.132-139). New York: Psychology Press.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-207). New York: Springer-Verlag. [https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-1-4613-9564-5\\_10](https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-1-4613-9564-5_10)
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., Simon, L., & Pinel, E. (1992). Why do people need self-esteem? Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology, 63*, 913-922. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.63.6.913>
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and

- stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27. <http://dx.doi.org/10.1037/0033-295X.102.1.4>
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038. <http://dx.doi.org/10.1037/0022-3514.79.6.1022>
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of personality and social psychology*, 85, 197-216. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.2.197>
- Haefel, G. J., Abramson, L. Y., Brazy, P. C., Shah, J. Y., Teachman, B. A., & Nosek, B. A. (2007). Explicit and implicit cognition: A preliminary test of a dual-process theory of cognitive vulnerability to depression. *Behaviour research and therapy*, 45, 1155-1167. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2006.09.003>
- Harrell, T. H., & Ryon, N. B. (1983). Cognitive-behavioral assessment of depression: clinical validation of the automatic thoughts questionnaire. *Journal of consulting and clinical psychology*, 51, 721. <https://doi.org/10.1037/0022-006X.51.5.721>
- Hofmann, W., Gawronski, B., Gschwendner, T., Le, H., & Schmitt, M. (2005). A meta-analysis on the correlation between the Implicit Association Test and explicit self-report measures. *Personality and social psychology bulletin*, 31, 1369-1385. <https://doi.org/10.1177/0146167205275613>
- 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011). 自尊感情の3様態——自尊源の随伴性と充足感からの整理—— 心理学研究, 81, 560-568. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.81.560>
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1\\_74](https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1_74)
- Izuma, K., Kennedy, K., Fitzjohn, A., Sedikides, C., & Shibata, K. (2018). Neural activity in the reward-related brain regions predicts implicit self-esteem: A novel validity test of psychological measures using neuroimaging. *Journal of personality and social psychology*, 114, 343-357. <https://doi.org/10.1037/pspa0000114>
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969-978. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.5.969>
- Jordan, C. H., & Zeigler-Hill, V. (2013). Fragile self-esteem: The perils and pitfalls of (some) high self-esteem. In V. Zeigler-Hill (Ed.), *Self-esteem* (pp.1-20). New York: Psychology Press. <https://doi.org/10.4324/9780203587874>
- Kahneman, D. (2003). A perspective on judgment and choice: Mapping bounded rationality. *American Psychologist*, 58, 697-720. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.58.9.697>
- Karpinski, A. (2004). Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other.

- Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 22-34.  
<http://dx.doi.org/10.1177/0146167203258835>
- Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 16-32.  
<https://doi.org/10.1037/0022-3514.91.1.16>
- 河村茂雄・田上不二夫 (1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.
- 賀屋育子 (2021). 児童期における他律的セルフ・エスティームに関する研究 — 概念, 測定法, 教育方法の観点から — 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士論文 (未刊行) <http://id.nii.ac.jp/1624/00029239/>
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26. [https://doi.org/10.1207/S15327965PLI1401\\_01](https://doi.org/10.1207/S15327965PLI1401_01)
- Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C. R., Berry, A. J., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 1190-1204. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.65.6.1190>
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclary, L. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1022. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.56.6.1013>
- Kesting, M. L., Mehl, S., Rief, W., Lindenmeyer, J., & Lincoln, T. M. (2011). When paranoia fails to enhance self-esteem: explicit and implicit self-esteem and its discrepancy in patients with persecutory delusions compared to depressed and healthy controls. *Psychiatry Research*, 186, 197-202. <https://doi.org/10.1016/j.psychres.2010.08.036>
- 越智啓太 (2018). 意識的な行動の無意識的な理由：心理学ビジュアル百科 創元社
- 国立青少年教育振興機構 (2015). 高校生の生活と意識に関する調査報告書 — 日本・米国・中国・韓国の比較 — 独立行政法人国立青年教育振興機構 Retrieved January 23, 2023 from [http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/98](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98)
- 近藤卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学：理論・測定・実践 金子書房
- Koole, S. L., Dijksterhuis, A., & van Knippenberg, A. (2001). What's in a name: Implicit self-esteem and the automatic self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 669-685. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.80.4.669>
- 厚生労働省 (2017a). こころの病気について理解を深めよう みんなのメンタルヘルス Retrieved January 23, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/kokoro/first/first01.html>
- 厚生労働省 (2017b). 平成29年(2017)患者調査の概況 厚生労働省 Retrieved January 23, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html>

- 厚生労働省 (2022). 第 13 回「地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会参考資料 1 厚生労働省 Retrieved January 23, 2023 from [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_26129.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26129.html)
- Lane, K.A., Banaji, M.R., Nosek, B.A., & Greenwald, A.G. (2007). Understanding and using the implicit association test: IV: What we know (so far) about the method. In B. Wittenberink & N. Schwarz (Eds), *Implicit measures of attitudes: Procedures and controversies* (pp. 59-102). New York: Guilford Press.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- Leeuwis, F. H., Koot, H. M., Creemers, D. H., & van Lier, P. A. (2015). Implicit and explicit self-esteem discrepancies, victimization and the development of late childhood internalizing problems. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 43, 909-919. <http://dx.doi.org/10.1007/s10802-014-9959-5>
- Mierke, J., & Klauer, K. C. (2003). Method-specific variance in the implicit association test. *Journal of personality and social psychology*, 85, 1180-1192. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.6.1180>
- Moller, A. C., Friedman, R., & Deci, E. L. (2006). A self-determination theory perspective on the interpersonal and intrapersonal aspects of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers* (pp. 188-194). New York: Psychology Press.
- 内閣府 (2014). 平成 25 年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査報告書 内閣府 Retrieved January 23, 2023 from [https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html)
- Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The go/no-go association task. *Social Cognition*, 19, 625-666. <https://guilfordjournals.com/doi/abs/10.1521/soco.19.6.625.20886>
- 小塩真司・茂垣まどか・岡田涼・並川努・脇田貴文 (2018). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響 — 2017 年刊行の論文まで — 日本教育心理学会第 60 回総会発表論文集, 358. [https://doi.org/10.20587/pamjaep.60.0\\_358](https://doi.org/10.20587/pamjaep.60.0_358)
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250-260. <https://doi.org/10.2132/personality.17.250>
- 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響 — Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析 — 教育心理学研究, 62, 273-282. <https://doi.org/10.5926/jjep.62.273>
- 小塩真司・脇田貴文・岡田涼・並川努・茂垣まどか (2016). 日本における自尊感情の時間横断的メタ分析 — 得られた知見とそこから示唆されること — 発達心理学研究, 27, 299-311. <https://doi.org/10.11201/jjdp.27.299>
- O'Brien, E. J., Bartoletti, M., & Leitzel, J. D. (2006). Self-esteem, psychopathology, and

- psychotherapy. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem issues and answers: A sourcebook of current perspectives* (pp. 306-315). New York: Psychology Press.
- Phelps, E. A., O'Connor, K. J., Cunningham, W. A., Funayama, E. S., Gatenby, J. C., Gore, J. C., & Banaji, M. R. (2000). Performance on indirect measures of race evaluation predicts amygdala activation. *Journal of Cognitive Neuroscience*, *12*, 729-738. <https://doi.org/10.1162/089892900562552>
- Pruessner, J. C., Hellhammer, D. H., & Kirschbaum, C. (1999). Low self-esteem, induced failure and the adrenocortical stress response. *Personality and individual differences*, *27*, 477-489. [https://doi.org/10.1016/S0191-8869\(98\)00256-6](https://doi.org/10.1016/S0191-8869(98)00256-6)
- Rae, J. R., & Olson, K. R. (2018). Test-retest reliability and predictive validity of the Implicit Association Test in children. *Developmental Psychology*, *54*, 308-330. <https://doi.org/10.1037/dev0000437>
- Reid-Russell, A., Miller, A. B., Cvencek, D., Meltzoff, A. N., & McLaughlin, K. A. (2022). Lower implicit self-esteem as a pathway linking childhood abuse to depression and suicidal ideation. *Development and psychopathology*, *34*, 1272-1286. <https://doi.org/10.1017/S0954579420002217>
- Risch, A. K., Buba, A., Birk, U., Morina, N., Steffens, M. C., & Stangier, U. (2010). Implicit self-esteem in recurrently depressed patients. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, *41*, 199-206. <https://doi.org/10.1016/j.jbtep.2010.01.003>
- Romero, N., Sanchez, A., Vázquez, C., & Valiente, C. (2016). Explicit self-esteem mediates the relationship between implicit self-esteem and memory biases in major depression. *Psychiatry Research*, *242*, 336-344. <http://dx.doi.org/10.1016/j.psychres.2016.06.003>
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton University Press.
- Rosenberg, M., & Owens, T. J. (2001). Low self-esteem people: A collective portrait. In T. J. Owens, S. Stryker, & N. Goodman (Eds.), *Extending self-esteem theory and research* (pp. 400-436). New York: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511527739.018>
- Sandstrom, M. J., & Jordan, R. (2008). Defensive self-esteem and aggression in childhood. *Journal of Research in Personality*, *42*, 506-514. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2007.07.008>
- Schmitt, D. P., & Allik, J. (2005). Simultaneous administration of the Rosenberg self-esteem scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *89*, 623-642. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.89.4.623>
- Schröder-Abé, M., Rudolph, A., & Schütz, A. (2007). High implicit self-esteem is not necessarily advantageous: Discrepancies between explicit and implicit self-esteem and their relationship with anger expression and psychological health. *European Journal of Personality*, *21*, 319-339. <https://doi.org/10.1002/per.626>



- 生徒指導提要 (2022). 生徒指導提要(改訂版) 文部科学省 Retrieved January 23, 2023 from [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1404008\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008_00001.htm)
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1994). 小学生用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究, 7, 46-58. [https://doi.org/10.11560/jahp.7.2\\_46](https://doi.org/10.11560/jahp.7.2_46)
- 潮村公弘 (2015). 潜在連合テスト (IAT) の実施手続きとガイドライン: 紙筆版 IAT を用いた実習プログラム・マニュアル 対人社会心理学研究, 15, 31-38. <https://doi.org/10.18910/54428>
- 潮村公弘・村上史朗・小林知博 (2003). 潜在的社会的認知研究の進展 — IAT (Implicit Association Test) への招待 — 人文科学論集 人間情報学科編, 37, 65-84. <http://hdl.handle.net/10091/624>
- 須崎康臣・兄井彰 (2013). 小学生と中学生を対象にした Rosenberg における自尊感情尺度の妥当性, 信頼性及び因子構造の検討 日本生活体験学習会誌, 13, 93-98. <https://doi.org/10.15017/1456152>
- Sowislo, J. F., & Orth, U. (2013). Does low self-esteem predict depression and anxiety? A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, 139, 213-240. <https://doi.org/10.1037/a0028931>
- Steinberg, J. A., Karpinski, A., & Alloy, L. B. (2007). The exploration of implicit aspects of self-esteem in vulnerability stress models of depression. *Self and Identity*, 6, 101-117. <http://dx.doi.org/10.1080/15298860601118884>
- Strack, F., & Deutsch, R. (2004). Reflective and impulsive determinants of social behavior. *Personality and Social Psychology Review*, 8, 220-247. [https://doi.org/10.1207/s15327957pspr0803\\_1](https://doi.org/10.1207/s15327957pspr0803_1)
- 高垣忠一郎 (2011). 子どもの心を“聴く” 春日井敏之・伊藤美奈子 (編) よくわかる教育相談 (pp. 14-15) ミネルヴァ書房
- 田中道弘 (2011). 自己肯定感 榎本博明 (編) 自己心理学の最先端 : 自己の構造と機能を科学する (pp. 129-140) あいり出版
- 田中道弘・上地勝・市村國夫 (2003) . Rosenberg の自尊感情尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要, 52, 115-126. <http://id.nii.ac.jp/1354/00000873/>
- 谷伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17, 18-28. <https://doi.org/10.2132/personality.17.18>
- 筒井健一郎・渡邊正孝 (2008). 報酬の脳内表現 生理心理学と精神生理学, 26, 5-16. <https://doi.org/10.5674/jjppp1983.26.5>
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 — Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて — 東北大学大学院教育学研究科年報, 58, 257-266. <http://hdl.handle.net/10097/48758>

- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子 (2019). 自律的ならびに他律的セルフ・エスティーム潜在連合テストにおける刺激語の構成. 鳴門教育大学研究紀要, 34, 1-9. <https://doi.org/10.24727/00028098>
- 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子 (2017). 「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築 — セルフ・エスティーム研究刷新への黎明 — 鳴門教育大学研究紀要, 32, 1-19. <http://doi.org/10.24727/00027965>
- 横嶋敬行 (2019). 児童期における自律的セルフ・エスティームに関する研究：測定法の開発および教育の効果評価への適用 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士論文 (未刊行) <http://hdl.handle.net/10132/17784>
- 横嶋敬行 (2022a). 測定法の問題を克服する新規測定法の開発 山崎勝之 (編) セルフ・エスティームの研究と教育の再構築 — 概念と測定法から教育方法と効果評価まで — (pp. 22-28) 風間書房
- 横嶋敬行 (2022b) 教育効果の検証 山崎勝之 (編) セルフ・エスティームの研究と教育の再構築 — 概念と測定法から教育方法と効果評価まで — (pp. 181-204) 風間書房
- 横嶋敬行・野口太輔・賀屋育子・山崎勝之 (2021). 顔文字刺激を使った小学校低学年児童用の紙筆版潜在連合テストの予備的研究：自律的ならびに他律的自尊感情の測定法として 日本教育心理学会第63回総会発表論文集, 472. [https://doi.org/10.20587/pamjaep.63.0\\_472](https://doi.org/10.20587/pamjaep.63.0_472)
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発：信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討 教育実践学論集, 18, 1-13. <http://hdl.handle.net/10132/17136>
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2020). 子ども用の Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES) が測定する小学生の自尊感情の多側面 — Self-Esteem の適応的側面と不適応的側面に着目して — 学校保健研究, 62, 187-193. [https://doi.org/10.20812/jpnjschhealth.62.3\\_187](https://doi.org/10.20812/jpnjschhealth.62.3_187)
- 横嶋敬行・大上遊路・賀屋育子・山崎勝之 (2020). 児童用のタブレット PC 版セルフ・エスティーム潜在連合テストの開発. 感情心理学研究, 27, 61-66. [https://doi.org/10.4092/jsre.27.2\\_61](https://doi.org/10.4092/jsre.27.2_61)
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability. *Journal of Personality*, 74, 119-144. <https://doi.org/10.1111/j.1467-6494.2005.00371.x>